

[論文]

主観的ウェル・ビーイングにおける

美容資本の役割はなにか

—— 2018年インドネシアの地方自治意識調査の計量分析 ——

小林 盾^{*}・西村 謙一[†]・川端 健嗣[‡]

この論文は、人びとの容姿が、幸福や満足といった主観的ウェル・ビーイングに影響しているのかを検討する。そこで、「美容資本」を人的資本の1つとして概念化したうえで、人びとは時間や労力を美容資本に投資し、地位達成、家族形成、ウェル・ビーイングなどとして回収すると仮定する。先行研究では欧米社会が対象だったので、アジア社会としてインドネシアを事例とし、ランダム・サンプリングにもとづく訪問面接調査を実施してデータ収集した（分析対象は3,197人）。従属変数は「人生の階段」「主観的幸福感」「生活満足度」「ストレス」の4つのウェル・ビーイング（すべて11段階）とし、独立変数である容姿は調査員が5段階で評価した。分析の結果、(1)容姿がよい人ほど、人生の階段、主観的幸福感、生活満足度といった長期的なウェル・ビーイングが促進された。(2)ただし、ストレスのような短期的なウェル・ビーイングには、とくに効果がなかった。したがって、インドネシアでは美容資本への投資には、短期より長期的にウェル・ビーイングを促進させる役割があった。以上から、アジア社会でも、容姿が主観的ウェル・ビーイングを促進しうることが、はじめて確認された。

キーワード：主観的ウェル・ビーイング、美容資本、容姿

^{*} 成蹊大学文学部教授、成蹊大学社会調査研究所所長 jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp

[†] 大阪大学国際教育交流センター准教授 knishi@cice.osaka-u.ac.jp

[‡] 成蹊大学文学部調査・実習指導助手 kawakj@gmail.com

1 リサーチ・クエスチョン

1.1 ウェル・ビーイングと容姿

見た目がよい人は、幸福なのだろうか。ハンサムな人や美人は、幸せな人生をおくれるかもしれないし、関係ないかもしれない。もしかしたら、かえって不幸な生き方をせざるをえないかもしれない。

そうした見た目のよさを「容姿」とよび、幸せや生活への満足を「主観的ウェル・ビーイング」またはたんにウェル・ビーイングとよぼう。これまで、容姿と主観的ウェル・ビーイングの関係は欧米社会について明らかにされてきたが、アジア社会については未解明だった。そこで、この論文ではとくに東南アジア最大の国家であるインドネシアを事例とし、つぎのリサーチ・クエスチョンにアタックする。

リサーチ・クエスチョン インドネシア社会において、人びとの容姿レベルは、幸福や満足といった主観的ウェル・ビーイングに影響しているのか。

この問題を解明できれば、豊かな人生をおくるための多様なオプションを、提供できることだろう。しかし、もし未解明のままだと、人びとのあいだで容姿によってウェル・ビーイング格差が進行しても、ややもすれば気づけないかもしれない（ウェル・ビーイング格差については小林 2016）。

1.2 先行研究

これまで、容姿は身体的魅力 *physical attractiveness*、美容・容姿 *beauty*、見た目・外見 *looks* などとして概念化されてきた。

容姿とウェル・ビーイングの関係について、サーベイ・データを分析したものとして、Campbell et al. (1976) がある。アメリカ人を対象とした分析の結果、容姿がよい人ほど主観的ウェル・ビーイングが高かった。容姿は、調査員が調査後に「とてもハンサム、美人 *strikingly handsome or beautiful*」から「よくない *homely*」まで 5 段階で評価した。

Umberson and Hughes (1987) は、同じデータを再分析し、4 つの感情、主観的幸福感、生活満足度、ストレスが、属性や社会経済的地位（階層的地位）を統制しても、容姿によって有意に向上することを明らかにした（主観的幸福感のみ 10%水準）。かれらは「自己コントロールの感覚」が媒介しているためだろう、と推測する。

実験データを分析したものに、Diener and Fujita (1995) がある。アメリカの学生

を対象とした分析の結果、たしかに容姿のよい人ほど主観的ウェル・ビーイングが高かった。ただ、髪型、服装、化粧、笑顔などを統制したところ、関連が低下した。そのため、「ウェル・ビーイングが高い人ほど、容姿を工夫するため、容姿がよくなるかもしれない」という逆の因果関係の可能性が、示唆された。Noles et al. (1985)によれば、アメリカの学生を分析した結果、容姿がうつ状態とは無関係であった。

日本ではどうか。小林・谷本（2016）は東京都西東京市民を対象としたサーベイ・データを分析し、男性において20歳時容姿の自己評価が高いほど、現在の主観的幸福感が高いことをしめした（女性では効果なし）。容姿は自己評価されたが、小林（2017a）によれば、自己評価は他者からの評価とおおむね一致する。

日本以外のアジア社会については、小林・西村（2018）がサーベイ・データをもちてインドネシアにおける容姿の規定要因を分析した。Campbell et al. (1976)と同じように、調査員が5段階で容姿を評価した。その結果、肌の白さ（肌明度）が有意な効果をもつが、それでも教育と等価所得という社会経済的地位が高いほど容姿がよかった。ただし、主観的ウェル・ビーイングへの効果は、未解明である。

なお、主観的ウェル・ビーイングの代表格である主観的幸福感には、Layard (2005)によれば、7つの主な規定要因（ビッグ・セブン）がある。「家族」「収入」「雇用」「地域と友人」「健康」「個人の自由」「人生観 philosophy of life」であり、家族がもっとも規定力が高く、この順番で効果が低下する。日本社会における幸福感のメカニズムは、大竹他編（2010）に詳しい。

美容についての一般書は多数ある（神崎 2015, ワタナベ 2018 など）が、研究はかぎられる。欧米社会における美容の役割は Hamermesh (2011=2015) に、日本における美容の状況は谷本（2008）、谷本（2018）に詳しい。

1.3 理論, 仮定, 仮説

Hakim (2011) は、容姿の社会的役割を理論的に整理し、経済資本、文化資本 (Bourdieu 1979=1990)、社会関係資本 (Lin 2001=2008) とならんで、個人の資産とみなすことを提案する (erotic capital とよぶ)。どうように谷本 (2015) は、美容整形することを「外見資本への投資」ととらえる。

この論文では、これらと同じように合理的選択理論にたつて、人びとはあたかも株や土地に投資するように、自分の容姿に投資し、そこから成果を引き出すと仮定する（合理的選択理論の概要は小林 2017c）。ここでは投資対象を、小林 (2017b) と同じく「美容資本」とよび、以下のように定義と仮定をする（図1、美容資本概念の

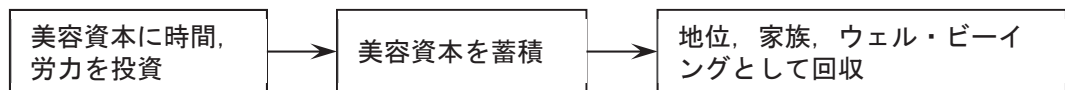


図 1 仮定（美容資本への投資と回収）

詳細は小林・西村 2018)。美容資本は、個人のもつ能力なので、人的資本の 1 つの形態と位置づけられる（人的資本については Becker 1964=1976）。

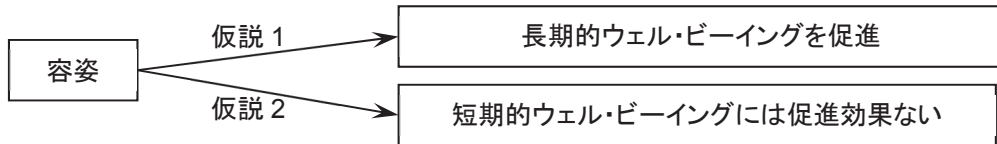
定義 人びとが時間や労力を自分の容姿に投資して、容姿を維持・向上させ、（教育・職業・収入といった）地位達成、（恋愛・結婚・出産といった）家族形成、（幸福・満足・健康・ストレス低下といった）ウェル・ビーイングなどから回収するとき、「美容資本に投資する」という。美容資本は人的資本のひとつであり、投資によって容姿が変化する。美容資本への投資には、心理面で美容規範、美容意識、流行への関心、行動面で雑誌などからの情報収集、身だしなみ、服装、髪型、化粧、スキン・ケア、ネイル、歯のホワイトニング、香水、ダイエット、エステ、美容整形、健康的な飲食、運動などがある。

仮定 1 人びとは時間や労力を人的資本としての美容資本に投資し、美容資本を蓄積し、地位達成、家族形成、ウェル・ビーイングなどとして回収する。投資に見合う回収ができるなら、投資することが人びとにとって合理的となる。

このように定義することで、人びとの容姿は生まれつき固定されたものではなく、コントロール可能で「努力によって変わるもの」ととらえることができる。Diener and Fujita (1995) の実験結果は、容姿が努力によって変化することを含意する。小林・西村 (2018) によれば、容姿レベルや肌明度は、合理的投資の結果として後天的に獲得されたものでもあった。

では、人びとはどのように美容資本への投資を、ウェル・ビーイングから回収するのだろうか。（Umberson and Hughes 1987 が主張するように）よい容姿によってコントロール感が高まるため、自信をもち、その結果高いウェル・ビーイングをえるのかもしれない。あるいは、他者から優遇されたり、恵まれた地位や家族関係を獲得できたりするためかもしれない。

ここで、小林・ホメリヒ (2014) と同じように、主観的ウェル・ビーイングを数年から人生全体にわたる「長期的ウェル・ビーイング」と、1 日から 1 年ほどの期間の



（注）矢印は因果関係を表す。

図 2 仮説

「短期的ウェル・ビーイング」へと分類してみよう。小林・ホメリヒ（2014）は、長期的ウェル・ビーイングとして主観的幸福感を、短期的ウェル・ビーイングとして生活満足度をあつかった。主観的幸福感は、いわばそれまでの人生を総括するのたいし、生活満足度は日々の生活を評価するものだからである。

ここで、小林・ホメリヒ（2014）と同じく、長期的な投資は長期的に回収され、短期的な投資は短期的に回収されると想定しよう。美容資本は、一朝一夕というより、どちらかといえば（数年など）長い時間をかけて蓄積されるものだろう。そうだとすれば、つぎのように仮定できる。

仮定 2 美容資本の蓄積は長期的なため、生活満足度のような短期的ウェル・ビーイングより、主観的幸福感のような長期的ウェル・ビーイングから回収されやすい。

ここから、以下の 2 つの仮説をたてることができる（図 2 は仮説をあらわす）。

仮説 1（長期的ウェル・ビーイングへの効果） 容姿のよい人ほど、主観的幸福感のような長期的ウェル・ビーイングが高いだろう。

仮説 2（短期的ウェル・ビーイングへの効果） 容姿がよい人とそうでない人のあいだで、生活満足度のような短期的ウェル・ビーイングに、違いはないだろう。

2 方法

2.1 データ

データとして、2018 年インドネシアの地方自治意識調査をもちいる。これは確率比例抽出にもとづいた量的調査で、訪問面接が 2018 年 5～6 月にインドネシアで実施された（調査の概要の詳細は小林・西村 2018 参照）。母集団は、ジャワ島の全 112

県市と、特別州の 2 市（ジャカルタ首都特別州の東ジャカルタ市，ジョグジャカルタ特別州のジョグジャカルタ市）の 114 県市における 20 歳以上個人である（特別州はこの 2 つのみ存在）。

計画標本は，各県市から 5 区村，各区村から 3 隣組，各隣組から 2 人（男女 1 名ずつ）が，すべて名簿によって確率比例抽出され，合計 3,420 人だった。拒否などがあった場合，男女を維持しつつ，つぎの該当者が予備標本として使用された（予備標本使用は有効回収のうち 10.6%）。

有効回収数は 3,412 人，有効回収率は 99.8%だった。年齢不明 2 名を無効票としてのぞいた。謝礼として，調査会社名いりのティーシャツを提供した。調査票では，英語とインドネシア語が併記された。

2.2 標本

分析では，使用する全変数に欠損のないサブ標本 3,197 人を，対象とする。内訳は，男性 50.1%，平均年齢 45.6 歳，未婚 7.0%/既婚 84.1%/離別 2.1%/死別 6.7%，平均世帯人数 4.3 人，平均子ども数 2.3 人，平均教育年数 8.7 年，公的教育なし 6.1%/小学校卒 41.0%/中学卒 17.6%/高校卒 24.7%/短大卒 2.7%/大学卒 7.3%/大学院卒 0.6%，フルタイム労働者 13.2%/パートタイム労働者 20.5%/自営・家族従業員 35.9%/主婦・主夫 22.2%/無職 8.2%，平均等価所得 1718.4 万ルピアであった（1 万ルピアは約 80 円）。

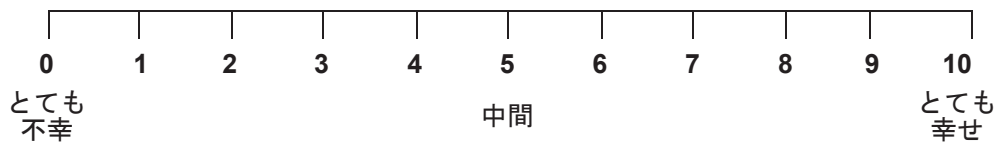
2.3 従属変数

この論文では，従属変数を 4 つもちいる。まず長期的ウェル・ビーイングとして，つぎの「人生の階段」と「主観的幸福感」の 2 つが測定された（変数の記述統計は表 1）。人生の階段は，人生全体のなかで自分の幸福度を評価したものとされる。

質問 1（人生の階段） 最下段の 0 から最上段の 10 まである階段を，想像してください．最上段はあなたにとって「最高の人生」を，最下段は「最低の人生」をあらわすとします．現在，あなたはどこにいますか．

10	最高の人生
9	
8	
7	
6	
5	中間
4	
3	
2	
1	
0	最低の人生

質問 2（主観的幸福感） 0 が「とても不幸」、5 が中間、10 が「とても幸せ」とします．現在，あなたはどれくらい幸せですか．



これにたいし，短期的ウェル・ビーイングとしてつぎの「生活満足度」と「ストレスのなさ」（ストレスなしとよぶ）の 2 つが質問された．

質問 3（生活満足度） 0 が「とても不満」、5 が中間、10 が「とても満足」とします．現在，あなたは以下のことにどれくらい満足していますか． A 生活全体．



質問 4（ストレスなし） 0 が「ストレスある」、5 が中間、10 が「ストレスない」とします．現在，あなたにはどれくらいストレスがありますか．

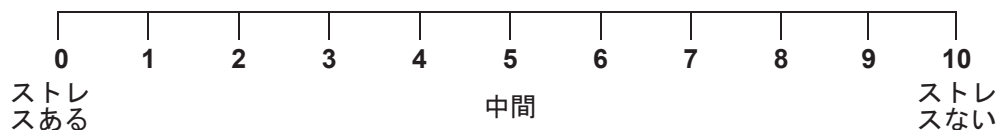


表 1 変数の記述統計

	変数	平均・比率	標準偏差	最小	最大	備考
従属変数	人生の階段	6.7	1.9	0 最低の人生	10 最高の人生	5 中間
	主観的幸福感	7.0	2.0	0 とても不幸	10 とても幸せ	5 中間
	生活満足度	6.8	1.9	0 とても不満	10 とても満足	5 中間
	ストレスなし	7.2	2.3	0 ストレスあり	10 ストレスなし	5 中間
独立変数	容姿	3.0	1.3	1 もっともハンサム・美人でない	5 もっともハンサム・美人	
統制変数	性別（男性ダミー）	50.1%	0.5	0	1	
	年齢	45.6	14.1	20	92	単位歳
	婚姻状態	(非該当)	(非該当)	(非該当)	(非該当)	未婚，既婚， 離死別で分析
	主観的健康感	7.6	2.1	0 不健康	10 健康	5 中間
	教育（教育年数）	8.7	3.9	0	18	単位年
	職業（有職ダミー）	69.7%	0.5	0	1	
	収入（等価所得）	1,718.4	2,029.5	53.7	23,555.9	単位万ルピア

(注) $N=3,197$ 。教育年数は公的教育なし 0 年，小学校 6 年，中学 9 年，高校 12 年，短大 14 年，大学 16 年，大学院 18 年。婚姻状態はカテゴリのため，平均などが非該当。

2.4 独立変数

独立変数は，仮説にもとづきつぎの容姿とする。聞きとりがおわってから，調査員が評価し記入した。Hamermesh (2011=2015) にしたがって，評価対象は「髪型をふくむ顔」とし，服装やスタイルはのぞいた。

質問 5 (容姿) 対象者は，どれくらいハンサム・美人でしたか。髪型をふくむ顔が対象であり，服装やスタイルは考慮しないでください。

- 1 あなたの担当した対象者のなかで，もっともハンサム・美人でない 20%
- 2 つぎの 20%
- 3 つぎの 20%
- 4 つぎの 20%
- 5 もっともハンサム・美人な 20%

このように，調査員が担当した対象者のうちで，相対評価とした。調査員は原則として 2～3 村を割りあてられるため，12～18 名ほどの回答者を担当する。かならず対象者の写真を 2 枚撮影し，自分の担当がすべて終了してから，全員をふりかえって評価した。

なお，調査員によって評価に偏りがあるかもしれない。そこで，調査員の性別，年

年齢を独立変数として、容姿を従属変数とした回帰分析をおこなったが、有意な効果はなかった。そのため、調査員の属性による偏りはないと判断できる。

2.5 統制変数、分析方法

統制変数には、Umberson and Hughes（1987）を参考にし、属性として性別（男性ダミー）、年齢、婚姻状態を使用する。婚姻状態は未婚、既婚、離死別の3カテゴリで分析し、ベースラインは未婚とする。社会経済的地位として教育（教育年数）、職業（有職ダミー）、収入（等価所得）の3つをもちいる。従業上の地位は、有職と無職の2カテゴリで分析し、ベースラインは無職とする。さらに、Layard（2005）を参考にし、主観的健康感を質問した（質問2～4と同じ形式の11段階で、0が不健康、10が健康）。

分析では、4つの従属変数ごとに、回帰分析をおこなう。

3 分析結果

3.1 分布

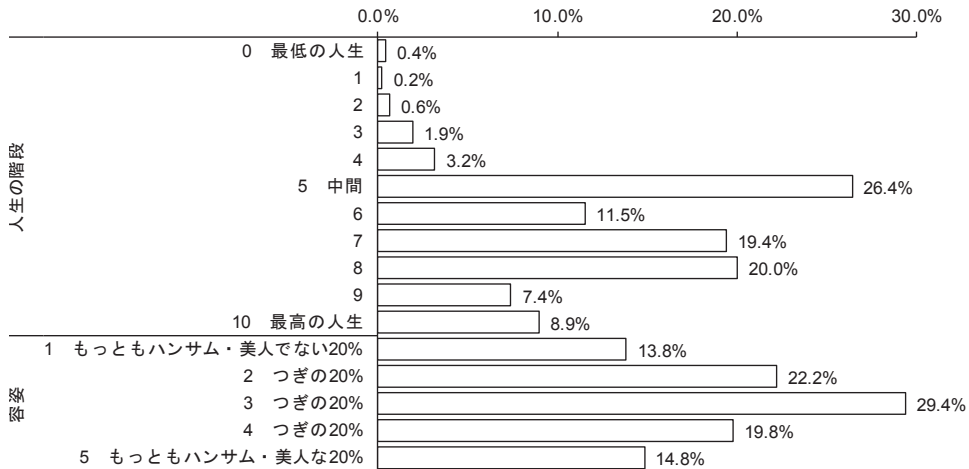
表1が、従属変数と独立変数の記述統計を報告している。これによれば、従属変数である4つのウェル・ビーイングはどれも、0～10の範囲のうち平均が7前後であり、標準偏差が2前後だった。独立変数である容姿は、1～5の範囲で、平均3.0、標準偏差1.3となった。

図3は、標本から2人のウェル・ビーイングと容姿を紹介している。図4は、従属変数のうち人生の階段と、独立変数である容姿の分布をしめす。人生の階段は、5



（注）筆者撮影，本人の許可をえて掲載。左は20代男性Aさん，人生の階段6，主観的幸福感7，生活満足度5，ストレスなし7，容姿3。右は50代女性Bさん，人生の階段6，主観的幸福感5，生活満足度6，ストレスなし8，容姿4。

図3 ウェル・ビーイング，容姿の例



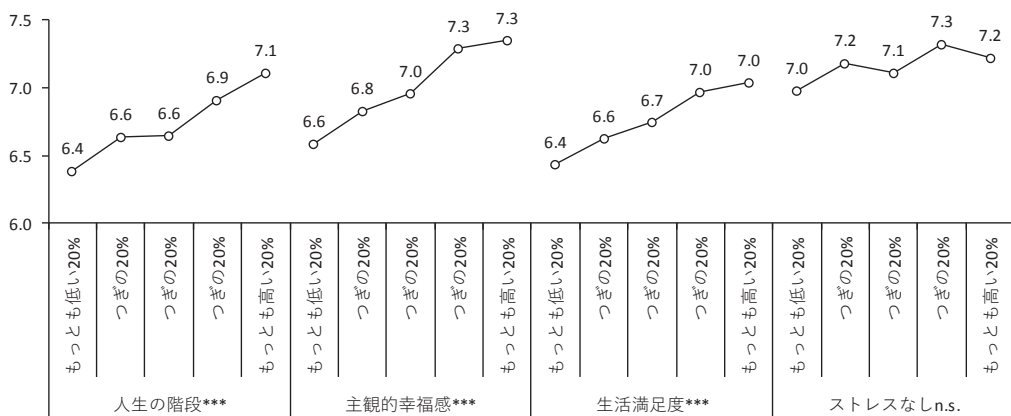
(注) $N=3,197$.

図4 従属変数（人生の階段）と独立変数（容姿）の分布

中間でもっとも多く、8と10最高の人生でも山となった。他の3つのウェル・ビーイングも、おおむね似た分布となった。容姿の分布は、中間である3を中心に、おおむね一山で左右対称となった。

3.2 グループ別比較

独立変数のグループ別に従属変数を比較すると、どうなるか。図5が、独立変数である容姿の値別に、4つのウェル・ビーイングの平均を報告している。



(注) $N=3,197$. 標本サイズはもっとも低い20%446人、つぎの20%712人、つぎの20%944人、つぎの20%633人、もっとも高い20%477人。分散分析で***は $p < .001$ で有意、n.s.は $p \geq .10$ で有意でない。

図5 容姿グループ別、主観的ウェル・ビーイングの平均の比較

どのウェル・ビーイングも、容姿がよい人ほど、高くなることがわかる。11段階のうち、0.3から0.7ほど上昇した。ただし、分散分析の結果、ストレスのみ有意な違いがなかった（他は0.1%水準で有意）。

なお、（図表は省略するが）統制変数の効果を確認した。分散分析の結果、性別グループ別では、人生の階段が女性ほど有意に高かったが、他のウェル・ビーイングでは違いがなかった。10歳ごとの年齢グループ別では、人生の階段と主観的幸福感が若い人ほど有意に高く、他のウェル・ビーイングに違いはなかった。婚姻状態で（離死別をまとめて）3グループで比較したら、おおむね既婚者がもっとも高く、未婚者、離死別者がつづいた。ただし、ストレスのみ有意な差がなかった。主観的健康感の5つの値別では、健康な人ほどどのウェル・ビーイングも上昇した。

社会経済的地位別ではどうか。教育を教育年数によって7グループにわけたら、教育が高い人ほど、すべてのウェル・ビーイングが有意にあがった。等価所得を4分位で4グループにわけても、同様に高収入の人ほどすべて有意に上昇した。ただし、有職者と無職者のあいだでは、すべてのウェル・ビーイングで、違いが観察されなかった。

3.3 回帰分析

こうした効果をたがいに統制すると、どうなるか。表2が、4つのウェル・ビーイングをそれぞれ従属変数とした回帰分析の結果を、報告している。

表2 4つのウェル・ビーイングを従属変数とした回帰分析結果

	従属変数			
	人生の階段	主観的幸福感	生活満足度	ストレスなし
統制変数				
男性ダミー	0.084 ***	0.010	0.017	-0.009
年齢	0.029	0.022	0.095 ***	0.097 ***
既婚ダミー	-0.011	0.069 **	0.024	-0.002
離死別ダミー	-0.018	-0.033	-0.031	-0.013
主観的健康感	0.208 ***	0.292 ***	0.272 ***	0.441 ***
教育年数	0.121 ***	0.118 ***	0.098 ***	0.005
有職ダミー	0.031 †	-0.009	-0.020	-0.005
等価所得	0.128 ***	0.108 ***	0.132 ***	0.008
独立変数				
容姿	0.039 *	0.045 *	0.045 *	0.013
決定係数	0.107	0.151	0.124	0.189

（注）N=3,197。値は標準化係数。既婚ダミーと離死別ダミーのベースラインは未婚、有職ダミーのベースラインは無職。教育年数は公的教育なし0年、小学校6年、中学9年、高校12年、短大14年、大学16年、大学院18年。* は $p<.05$ ，** は $p<.01$ ，*** は $p<.001$ で有意。

この表によれば、図 5 における容姿の有意な効果は、統制変数で統制してもなお、維持された。つまり、容姿がよい人ほど、人生の階段、主観的幸福感、生活満足度が有意に高いが、ストレスに有意な違いはなかった。

統制変数の効果をみると、すべてのウェル・ビーイングに有意な効果をもったのは、主観的健康感のみだった（健康な人ほどウェル・ビーイングが高かった）。教育年数と等価所得は、人生の階段、主観的幸福感、生活満足度を有意に促進した。

他に、男性ほど人生の階段が、年配者ほど生活満足度とストレスが、既婚者ほど主観的幸福感が、それぞれ有意に改善された。

これらの効果は、先行研究とおおむね一致する。たとえば Kobayashi and Aldar (2018) によれば、インドネシアで女性ほど、教育が高い人ほど、等価所得が多い人ほど、人生の階段がよかった。また、容姿がストレスに効果をもたなかったことは、Noles et al. (1985) の「ネガティブな感情は容姿の影響を受けにくい」という結果と、一致する。

3.4 頑健性のチェック

男女別で分析したところ、人生の階段で女性が、主観的幸福感で男性が、生活満足度で男女ともに、容姿の効果が有意でなくなった。ただし、全標本で性別と容姿の交互作用をしらべたところ、有意な効果ではなかったの、男女で容姿の役割に違いがあるとはいえなかった。20 歳ごとの年齢階級別（20～30 代、40～50 代、60 代以上）で分析したところ、おおむね同じ結果がえられ、40～50 代で容姿の効果がもっとも強くなった。

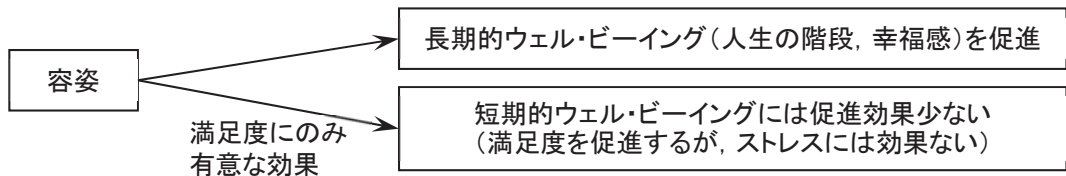
独立変数に肌明度（肌の白さ、5 段階）と BMI（肥満度をあらわす体格指数）を追加したら、容姿の効果がきえることもあったが、そうした場合でも肌明度、BMI のどちらかが有意な効果をもった。

統制変数から主観的健康感をのぞいても、世帯人数、子ども数を追加しても、また教育年数のかわりに高校以上ダミーをもちいても、職業として有職・無職のかわりに雇用者・自営・無職をもちいても、等価所得のかわりに個人収入や世帯収入をもちいても、容姿の効果に変化なかった。

4 考察

4.1 分析結果の要約、仮説の検証

図 6 が、分析結果を要約している。表 2 より、長期的ウェル・ビーイングとした



（注）矢印は表 2 における有意な効果を表す。

図 6 分析結果の要約

人生の階段と主観的幸福感の両方とも、容姿がよいと上昇した。いっぽう、短期的ウェル・ビーイングとした生活満足度とストレスのうち、生活満足度は容姿によって向上したが、ストレスは変化なかった。したがって、仮説の検証結果を以下のようにあたえることができる。

仮説の検証結果 仮説 1（長期的ウェル・ビーイングへの効果）は、支持された。予想どおり、人生の階段と主観的幸福感が、容姿によって促進された。いっぽう、仮説 2（短期的ウェル・ビーイングへの効果）は、一部支持された。容姿による違いがストレスになかったのは予想どおりだったが、生活満足度は容姿によって促進された。

仮定 2 では、生活満足度を短期的ウェル・ビーイングととらえたが、もしかしたら人びとは数年から数十年単位で自分の生活をふりかえって、評価している可能性がある。そうだとすれば、長期的ウェル・ビーイングと位置づけるほうが、適切だったのかもしれない。そもそも、「生活」は英語で life のため、「人生」「生き方」という意味にもうけとれる。

4.2 リサーチ・クエスチョンへの回答，インタビュー，ウッドクラブ

そこで、生活満足度を短期ではなく長期的ウェル・ビーイングととらえなおせば、リサーチ・クエスチョンに以下のように回答できるだろう。

リサーチ・クエスチョンへの回答 インドネシア社会において、容姿がよいと、幸福や満足といった長期的なウェル・ビーイングが促進された。ただし、ストレスのような短期的なウェル・ビーイングには、とくに効果がなかった。したがって、美容資本への投資には、短期より長期的にウェル・ビーイングを促進させる役割があるといえる。以上から、アジア社会でも、容姿が主観的ウェル・ビーイングを促進しうることが、はじめて確認された。

なお、この量的調査を実施するとき、一部の対象者に追加のインタビュー調査をおこなった。そのうち、図3左の20代男性Aさんは、(0~10のうち)人生の階段6、主観的幸福感7、生活満足度5、ストレスなし7と回答し、調査員から(1~5のうち)容姿3と評価された。「人生の階段がなぜ10最高の人生ではないのか」ときいたら、「政府の福祉政策が不十分で、(自分は正社員だが)働きたくても働けない人がいるから。もし10代にもっと仕事があれば、10になる」とのことだった。さらに、「幸せとは一言でいうと、どのようなものか」と質問した。

筆者(小林): 幸せとはあなたにとって、どのようなものでしょうか。幸せと書いて、どんなイメージが浮かびますか。

Aさん: 他人のために役だつこと、だと思えます。自分はいつもそうありたいと思っていて、なかなか難しいのですが、たまに役だてたなと思ったときは幸せを感じます。

このように、容姿との関連は、とくに言及されなかった。

つぎに、図3右の50代女性Bさんは、人生の階段6、主観的幸福感5、生活満足度6、ストレスなし8で、容姿4とされた。「人生の階段が10でないのはなぜか」をきくと、「もう若くないからで、それ以外は全部満足している」という。

筆者(小林): 幸せとはあなたにとって?

Bさん: すべてが手にはいることです。夫は公務員だったけど、退職したのでいまは収入ありません。そのぶん、自分がワルン(小さなカフェ)を経営してかせいでいます。あと若さとか、きれいでいることとか、そういうのがやっぱり全部ほしい。欲張りかも。

このように、Bさんにとって、若さや美しさといった容姿が、幸せにつよくむすびついていて、Bさんは女性であり、50代であることから、20代男性のAさんより美容を意識せざるをえないのかもしれない。

さて、美容資本とは、たとえるならゴルフクラブの「ウッドクラブ」のようなものといえよう。アイアンやパターは比較的短距離のショットにむくのにたいし、ウッドは長距離のロングショットにむく。同じように、美容への投資は数日や数週間で成果がでるというより、数年、数十年の時間がかかるのかもしれない。その結果、短期的なストレス軽減より、長期的な人生の階段や主観的幸福感を底上げしてくれる

といえよう。

4.3 今後の課題

この論文の結果から、異なるウェル・ビーイングには、異なる支援が必要であることが示唆される。幸福感や満足度の格差を是正するには、容姿へのなんらかの支援が役だつ可能性がある。しかし、ストレスの格差是正には、とくに効果がないだろう。

今回の分析結果は、おおむね先行研究と一致し、欧米社会における容姿とウェル・ビーイングの関係がアジア社会でも追認された。しかし、欧米とは異なる「アジア型」のウェル・ビーイングのメカニズムが、見逃されたかもしれない。たとえば、アジアでは肌の白さ（肌明度）が容姿の重要な要素となっていたり（小林・西村 2018 がこのことをしめす）、家族関係や宗教意識がウェル・ビーイングをつよく規定したりするかもしれない。

この論文では、「容姿がウェル・ビーイングに影響する」という一方向の因果関係を想定した（仮定 1）。しかし、Diener and Fujita (1995) が指摘するように、「幸せな人ほど容姿を工夫するため、容姿が向上する」という逆の可能性も、排除できない。もしかしたら、容姿とウェル・ビーイングが、相互に強化しあうのかもしれない。さらに、親の容姿が、子の容姿とウェル・ビーイングに共通の原因となっている、という可能性もあるかもしれない。

【付記】 本研究は JSPS 科研費 JP15H02600 の助成を受けたものです。執筆に当たり、岡本正明氏、永井史男氏、長谷川拓也氏、松永由紀子氏、Wahyu Prasetyawan 氏から有益なコメントをいただきました。分担は、西村が調査を設計・実施し、川端がデータ整理をおこない、小林が分析と執筆をおこないました。

【文献】

- Becker, G. S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, National Bureau of Economic Research. (=1976, 佐野陽子訳『人的資本——教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社)
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique Social du Jugement*, Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』I, II, 藤原書店)
- Campbell, A., P. E. Converse, and W. L. Rodgers, 1976, *The Quality of American Life: Perceptions, Evaluations, and Satisfaction*, Russell Sage Foundation.
- Diener, E., B. Wolsic, and F. Fujita, 1995, “Physical Attractiveness and Subjective Well-Being,”

- Journal of Personality and Social Psychology* 69(1): 120–29.
- Hakim, C., 2011, *Erotic Capital: The Power of Attraction in the Boardroom and the Bedroom*, Basic Books.
- Hamermesh, D. S., 2011, *Beauty Pays: Why Attractive People Are More Successful*, Princeton University Press. (=2015, 望月衛訳『美貌格差——生まれつき不平等の経済学』東洋経済新報社)
- 神崎恵, 2015, 『神崎恵の Private Beauty Book』大和書房.
- 小林盾, 2016, 「幸福格差社会か幸福平等社会か——社会学における幸福感研究」『TASC MONTHLY』12: 13–18.
- , 2017a, 「容姿の自己評価は他者からの評価と一致するのか——自計式調査による測定の可能性」『成蹊大学文学部紀要』52: 122–33.
- , 2017b, 『ライフスタイルの社会学——データからみる日本社会の多様な格差』東京大学出版会.
- , 2017c, 「合理的選択理論の基礎と応用——実証研究への人的資本, 社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル), 文化資本をどう応用できるか」『理論と方法』32(1): 163–76.
- Kobayashi, J. and D. Aldar, 2018, “Inequality of Well-being in Asia: A Comparative Analysis of Happiness in Eight Countries,” *The Senshu Social Well-being Review* 5: 75–82.
- 小林盾, カローラ・ホメリヒ, 2014, 「生活に満足している人は幸福か——SSP-W2013-2nd 調査データの分析」『成蹊大学文学部紀要』49: 229–37.
- 小林盾・西村謙一, 2018, 「インドネシアにおける容姿の規定メカニズムの計量分析——美しさは生まれつきか, 合理的な投資戦略か」『アジア太平洋研究』43 (印刷中).
- 小林盾・谷本奈穂, 2016, 「容姿と社会的な不平等——キャリア形成, 家族形成, 心理にどう影響するのか」『成蹊大学文学部紀要』51: 99–113.
- Layard, R., 2005, *Happiness: Lessons from a New Science*, Penguin Press.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (=2008, 筒井淳也他訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房)
- Noles, S. W., T. F. Cash, and B. A. Winstead, 1985, “Body Image, Physical Attractiveness, and Depression,” *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 53(1): 88–94.
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編, 2010, 『日本の幸福度——格差・労働・家族』日本評論社.
- 谷本奈穂, 2008, 『美容整形と化粧の社会学——プラスチックな身体』新曜社.

- , 2015, 「美容——美容整形・美容医療に格差はあるのか」 小林盾・山田昌弘編
『ライフスタイルとライフコース——データで読む現代社会』新曜社.
- , 2018, 『美容整形というコミュニケーション——社会規範と自己満足を超えて』
花伝社.
- Umberson, D. and M. Hughes, 1987, “The Impact of Physical Attractiveness on Achievement and
Psychological Well-Being,” *Social Psychology Quarterly* 50(3): 227–36.
- ワタナベ薫, 2018, 『美人になる方法——運と出会いを引き寄せる 25 のルール』PHP 研
究所.

What are Roles of Beauty Capital on Subjective Well-being?:

Analysis of 2018 Opinion Survey on Local Governance in Indonesia

Jun Kobayashi/Kenichi Nishimura/Kenji Kawabata

Seikei University/Osaka University/Seikei University

jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp/knishi@ciece.osaka-u.ac.jp/kawakj@gmail.com

This paper scrutinizes roles of beauty capital on subjective well-being. For this purpose, “beauty capital” is conceptualized as enhancing status attainment, family formation, and subjective well-being as one form of human capital. The literature has focused on Western societies, so the paper collected data in Indonesia as a case of Asian societies. A face-to-face survey was conducted on a representative sample in Java (sample size is 3,197). Dependent variables consist of the ladder of life, subjective happiness, life satisfaction, and stress, each on an eleven-point scale. Interviewers evaluated respondents’ physical attractiveness on a five-point scale. Findings include that (1) better looking people raised long-term well-being, such as the ladder of life, subjective happiness, and life satisfaction. (2) Beauty had, however, no effects on short-term well-being, such as stress. Therefore, investment in beauty capital had a promoting role on long-term rather than short-term well-being in Indonesia. The paper first unveils positive relationships of physical attractiveness and psychological well-being in an Asian society.

Keywords: subjective well-being, beauty capital, physical attractiveness